

丸岡秀子

いのち、ひび韻あり

岩波書店

丸岡秀子

いのち、ひびき韻あり

岩波書店

いのち、韻あり

一九八九年十一月二十九日 第一刷発行 ©
一九八九年二月二〇日 第二刷発行

定価一五〇〇円
(本体一四五六円)

著 者 丸 岡 秀 子

発 行 者 緑 川 亨

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三・六五四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・法令印刷 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-000131-0

目次

余白に挑む……………	1
------------	---

“悟りの境地”とは

海原の眺めに揉まれて

矛盾かかえ老齡化の道

老人が地域で世話焼き

育ての親、ああ祖母よ

まあ、まあと言いながら

“論語読みの論語知らず”

表題の意味について

野球ファンの一人です

ある青年へのレクイエム

いのちを作るのは自分
一万円札のお顔の人の言葉
伴侶のニックネーム
子連れ出勤に言いたい
幼い娘を連れ歩いて
濃い緑こそ自然との接点
旅と水のことあれこれ
気になるイントネーション
短冊に書かれた米価史
外国での出会いと感動
一期一会のなかから
大人の側にこそ責任
事故にひそむ時代背景
女丈夫先生の仕付け

女の歴史の高い峰々

あるママさん選手の話から

いのちと終りなき対決

手づくりの教育……………95

教育の周辺

子どもたちの現場

「誕生の詩」

働くことは生きること

憲法の生活化を

ほんとの愛とは何か

手づくりの教育

期待に揺れる青春の旅

小学校時代は教育の根っこ

十代の労働は腕や足をつくる

「ハーイ」と思わず手が上がる

いよいよ登る太鼓楼

教育へかけた夢とロマン

復習と集中力のたいせつさ

近所のおじさん、おばさん

自分のことは自分で始末

自分に克つ者が偉い

家の手伝いは授業と同じ

“しっかり翔んで行け”

現役の一人として

女の生き方

.....209

農村婦人の生活と意見

目覚ましい女性の活力	
消費者と国民について	
母親大会の原点	
女性解放と家事	
生活の根源的課題	
差別の敵と平等の味方は	
家庭とは何か	
家事・育児の解決行路	
あとがき	257
初出掲載一覧	

余白に挑む

“悟りの境地”とは

四月八日は、お釈迦さまの誕生日、灌仏会かんぶつえである。亡くなられた涅槃会ねはんえのほうは、二月十五日で、とうに過ぎていた。それなのに、この涅槃会のほうは、いつまでも頭を離れない。

涅槃会は、季節になっていると、友の俳句好きは言ったが、そのとき、人生の隅々まで見渡そうとする日本の詩型の源流に、わたしは感じ入ったものだった。

わたしは、いま、高齢者の多いシルバー社会に保養の身である。優しく、穏やかに、伊豆の岬の向こうに沈む夕陽は、わたしを誘い、「煩惱を消し、高い悟りの境地へ」という涅槃会の祈りを、現代語に訳して問いかけてくる。“高い悟り”は、だれもが心に抱きかえ、しかも、それを諦念の逆言葉に利用するものだ。

“大往生”という言葉がある。これは、文字通り、「生に往くゆ」であって、「死に往く」ではない。

「りっぱな御最後でした。大往生でした」というのは、死者への賛辞だが、その“死”に対して、「大往生」でなく、なぜ「大往生」なのか。なぜ、「生に往く」の字を当てるのか。

シルバー社会の意識の深層は、何よりも健康問題にかかわり、さらに、もし最後がくるなら、だれにも面倒をかけないで、見苦しくなく、りっぱなものでありたい。

解放された悟りの境地でありたい。これは、万人の願いであって、そこに例外はない。平均寿命を越えた時点には、その時点でなければ、まったく想像もつかない弱り方が実在する。在宅介護か、病院か、それとも施設行きかの選択に迫られると、どんなに平素な素振りを見せようとも、心はまさに麻の如しだ。

ことに、放出し尽くしたエネルギーの後を経験したもののほど、“悟り”の境地に着きたくなる。

釈尊の涅槃が、大往生であるのは、「生に往く」のであって、「死に往く」のではないという心ばえの万分の一でも、意識の中にとどめておきたい。そんな気持ちを秘めているからだろう。

このごろ読んだ本に、亡くなられた桑原武夫氏の著『論語』がある。その中で、桑原さんは、「『老いの将に至らんとするを知らず』というのが、われわれ老境にあるものの覚悟でありたい」とされている。いつも、ユニークな発言と問題提起に明け暮れた桑原さんにして、この神妙な言葉はなぜなのかと、おかしくもあり、また底に秘めた素直さを感じさせられた。

桑原さんは、先に逝かれた吉川幸次郎氏に勧められて、この本を書いたといわれる。個性派のユニークな仏文学者が、東洋哲学の始祖と出会って、どういう接点を構築されたかがわかって面白くてならない。その上、吉川さんも、負けず劣らずの頑固派、おのれを持されて譲らない東洋文化の碩学である。この取り組みもまた見逃せない。

私事にわたるけれど、先年、逆縁を歎かせた娘は、若いころ、中国文学の編集に携わる機会に恵まれ、『中国詩人選集』（全十巻・岩波書店刊）を吉川先生の監修で刊行することになり、月に、一回か二回は、京都に出かけた。

この娘も、多少、個性派だっただけに、先生についてのエピソードが触角にふれると、それをわたしに聞かせて、たのしませてくれた。一つの学問で、これほど深奥をきわめら

れた方は少ないのではないかと、往復のたびに感動させられていたようだ。

いまごろ、あの先生の、自信をこめた厳しい口調に、おのれも口をすぼめて対坐しているのではないか。それとも、三途さんずの川の手前で、方向オンチの母親のくるのを待っていてくれているのだろうか、母親の想いは尽きない。

わたしたちが、毎日、食卓を共にする方に老夫妻がいる。このお二人が、あるとき、言い放ったものである。摂取量が少なければ、消耗を少なくするほかはない。

「朝寝して、夜寝よるねするまで昼寝して、間に起きて居眠りをする」。

ちゃんと、五七五の韻をふんでいる。これをシルバー社会の自虐めいた懸詞かけことばと受けとるのは自由だが、一方また、働いて、働いて、働き抜いてきたものの自信の逆表現と受けとることも可能だろう。

幾山河を越えてきたお年寄りの「隠し味」である。

高齢化社会と、ふたことめには言うけれど、その具体性は、いったい何なのか。その中身を通してとところでしか解らない問題性を抱えて、わたしは、「やっこらさ」と重い腰を上げる。

海原の眺めに揉まれて

この冬は、伊豆の熱海で過ごして、もう三カ月も経ってしまった。厳冬を予想しての周囲の配慮によるものだったが、風邪ひきの名人と言われているように、冬になると、体調を崩しやすく、そのたびに皆に心配をかけてきた。

だが、予想が外れて、暖冬と厳冬が入れかわってしまい、ここで静養する必要もなかったのと思いつながら、このように長居をしてしまった。

しかし、その間にも、自然は生活を相対化させることで、その美を成しているという発見の新鮮さがあった。

七曲がりの崖道を子どもたちが、あと先を争って馳けて来る。七時過ぎからの通学のせいで。崖の向こうの団地からは、マイカーが出てくる。バスも続く。段々畑には鍬をふるう二人の姿。海辺には、漁舟が固まっているのも、みずみずしい点景である。

わたしは、これらの自然と生活の光景から活力回復への一日のリズムを作っている。そ

して自分も、この自然と同様であるということを再確認した。

空にも、海にも、遠くに折り重なる山々にも、近くにある小さな疎林にも、脈々と命の継続がある。その仲間の一部に自分も存在しているのだという確認を新たにしたのだった。晴れ渡った日の海のさざなみの寄り添う美しさ。何をささやいているのか。そのやさしさに誘われて浜辺に座り、耳を傾けたい想いさえする日もある。このような日の雲と波の呼び合う姿は、フト恋人同士を想像させられる若やぎも妙だ。

そういえば、ここから二キロ近くに伊豆山神社がある。高い石段だから、わたしは怖くてただ下から眺めるだけだが、土地の人たちの話では、ここは昔、頼朝と政子が出逢いを重ねた場所だそうである。

いわば、源平、戦国時代の幕を開いた二人の時代につながる由緒の地。いまで言えば、デートの秘め場所が、二キロの先にある。これは他愛のない観光用のアドリブかも知れないが、心憎い話ではないか。

わたしも、もうしばらくすれば、修羅しゆらの巷ちまたへまた帰る。帰らないわけにいかない。とすれば、愛と優しさの一瞬を、六百年前の秘めごとに託すのも、少しは逆縁の悲傷から、心

にゆとりの生じた証かもしれない。

テラスの西側にある疎林の一本一本は、風の日には騒々しく揺れる。揺れながら、何かを語りかけてくる。幹も小枝も、ここでの歴史を体験して生きてきたその年月を想わないではいられない。その疎林に毎日の陽が沈んで行く。その瞬間の輝きは、ありったけのエネルギーで地球に今日の別れを告げているような気がする。

声のない自然と思い続けてきたわたしは、ここに暫く静養しながら、自然の群声とも言える韻をもまた聞くことができた。体の弱さも心身の落ち込みも、自分の力でこえてゆくことを可能にしなければならず、可能にしてゆける。

眼が疲れるだけの当世風映像主義など、問題ではない。

「生は寄なり、死は帰なり」という。ここまで、心定まれば、何もあわてることはいない。しかも、天寿とは、その人に属する生の終りであって、誰にもあてはまる寿命の目安でもあるまい。しかし、人生の余白は、誰のものでもある。

山国で生まれ育ったわたしは、いま相模の海原の眺めに揉まれて、新しい人生の余白へ向かおうとしているところである。

矛盾かかえ老齢化の道

息子が八ポ・ベタ組みの古典本を何冊か持ってやって来た。「これ、ロビーで読んでいたら」ということだった。親を退屈させまいという配慮からだろう。

ところが、どうしてどうして、こちらは退屈どころか、時間に追われ、予定を組み込み、一日はたちまち過ぎ去ってしまう。

だから、ベタ組みの本といっしょに持ってきた奇妙なレンズを使う暇はない。レンズは、葉書大で、本の上に置けば、そっくり拡大されて映る。

彼は、これを見せたかったからか。それで、ベタ組みの本をだしに使ったのか。それは、わからなかったが、わたしは、おかしくてならなかった。

“古い”とは何か。いま老齢化社会が強調される背後には、福祉費の累増と、税制問題を結びつけた意図が、ありありと見えるけれど、これは灰色のまま。とにかく“古い”を老齢化社会の問題に拡散するのは、よほど注意したいと思う。